

サクセスケース一覧（58ケース）

NO	名称	活動内容	
01-1-(1)	NPO法人（A）	ボランティア主体、介護保険以外での取り組み、NPO法人格・建物取得	ノウハウの提供→京都市独自のサービス（福祉施設からのサービス）
01-2-(2)	子育て支援講座	社協と子ども文庫との協働	子ども文庫からの相談
01-3-(3)	障害学生支援ボランティア	筋ジストロフィーを抱える学生に対するボランティアの募集及びコーディネート	大学でのトイレ・ノートテイク・学内の移動に対するボランティアの希望
07-1-(4)	当事者支援グループ	要介護高齢者やその家族が行う社会参加活動やレクリエーション活動の運営支援	機能訓練教室の終了、その後の活動の模索
07-2-(5)	福祉推進員交流組織	社協が実施している入浴サービス事業に、男性は送迎介助ボランティア、女性は入浴介助ボランティアとして活動	シンポジウムで在宅の介護現場における入浴サービスの必要性が指摘された
07-3-(6)	子育てサークル	就学前の母と子どもの活動を、子どもが楽しんで活動できるように、また親同士のつながりを深め一緒に子育てしていける仲間づくり	館長が児童館を地域に開放したいと考え、利用希望者を探していた
07-4-(7)	視覚障害者ボランティア	朗読、点字、手引き	視覚障害者支部からの相談
04-1-(8)	学区「手話と手芸の会」	手芸を通じた聴覚障害者と地域住民（健聴者）との交流、手話の学習	視覚障害者からの相談

時期	経過	成功要因	課題
1993年			施策としての推進、活動としての位置づけが難しくなっている(365日3食をボランティアで支える条件: 厨房、安全衛生)
2001年～	子育て支援講座「絵本と読み聞かせ」の実施	ボランティアグループとの日常の関わり	子育て支援事業の位置づけ、今後の方針
2003年6月中旬～	ニーズの整理、募集の仕方、ボランティアの回し方についての打ち合わせ	マッチングの段階でニーズの再整理を行い、よりよいボランティアの関わり方を再検討した事。・本人との連絡調整を丁寧に行い、ボランティアとの関わり方そのものを模索していった事。・当初、障害学生の友人を中心に数名が動いていたことから、学校側も組織的な協力体制がとれてきた事	より多くの学生の関わりと、全体の統括、コーディネートができるボランティアが必要・学校側としては「障害学生センター」の構築を構想している
2001年	参加者が中心とした、家族会、ボランティアを含む会の立ち上げ、保健所・社協の支援	マッチングの段階でニーズの再整理を行い、よりよいボランティアのかかわり方を検討、本人とのいねいな連絡調整、学校との組織的な協力体制	より多くの学生の関わり、全体をコーディネートができるボランティア
1985年	送迎車を購入、社協の声かけで25人のボランティアが集まる・老人福祉センターを増築して入浴設備を作る・入浴サービス事業開始	学区社協・住民の協力	ボランティアの高齢化、施設の老朽化
1995年	当時児童館の利用者だった現代表者が申し出た	地域の理解者の存在、キーパーソンの存在、継続的な活動拠点があること、運営の仕方(当事者・メンバーが全員活動にかかわる)	参加者の減少傾向、OBの組織作り・つながりづくり
1994 or 1995年	ボランティアスクールを共催で開催、スクールの修了生によるボランティアグループ「虹の会」の立ち上げ	社協と視覚障害者支部との協力、協働	対象者の限定化、支部側の「グループは下部組織」という意識、支部とグループの関係性
2002年3月	区社協から民生委員への相談手芸を通じて地域の健聴者と交流を図りたいという要望 学区社協と民生委員の援助で開催が実現	学区社協の会長に相談し、学区内で話し合ってもらったこと・要望を直接当該民生委員に確認してもらったこと	資金不足・参加者不足・作品(手芸品)を学区民にみてもらう場がない

NO	名称	活動内容	
04-2-(9)	福祉まつり	区域レベルでの福祉啓発に特化したイベント	当事者団体・ボランティアグループからの相談、バザーでの出店禁止
04-3-(10)	在宅支援グループ	中京区在住の高齢者・障害者に対する、介護保険に適用されないサービスの実施	区社協主催「3級ヘルパー講座」受講生からの要望
09-1-(11)	知的ハンディのある人たちを支えるボランティア入門講座	知的障害児者を支援する人材育成を目的とするボランティア入門講座	「何か始めよう会」（施設職員、当事者団体世話人、ボランティアグループ、個人、社協）の設立
09-2-(12)	障害者福祉サービス実務者会議	事業所のネットワーク会議	「何か始めよう会」（施設職員、当事者団体世話人、ボランティアグループ、個人、社協）の設立
09-3-(13)	支援費制度学習会	当事者や家族を対象とした支援費制度学習会	「何か始めよう会」（施設職員、当事者団体世話人、ボランティアグループ、個人、社協）の設立
09-4-(14)	知的障害者の外出支援事業	知的障害者の当事者組織メンバーとガイドヘルパーによる月に1回の外出行事の実施	クラブの活動として外出行事を実施したいとの相談があった。
09-5-(15)	学区社協 読み聞かせ教室	学区社協主催の読み聞かせ教室の実施（月2回）	・自分の住んでいる学区でサロニック（ミニ児童館的）な活動をしたいとの相談
09-6-(16)	子育てサークル連絡会	子育てサークルに関する連絡会の組織化(情報交換、学習、共同事業)	2つの子育てサークルから活動場所の確保等について相談があった
09-7-(17)	町内ネットワーク組織	相互支援ネットワーク（防火防犯のための夜回り、ボランティアコーディネート、会食会）	高齢化率が高まる地域で暮らし続けるため、住民の助け合いネットを模索

時期	経過	成功要因	課題
2002年6月	・区社協のかかわり ・区役所より財政的支援 ・施設、当事者団体、VGへの呼びかけ、企画	区役所からの各種支援、参画型の企画・運営により参加者の自発性・共同性の発揮、会場の無償確保	資金
2000年2月		受講生からのグループ化の声、具体的な活動の提供	一般区民からの個別の依頼が少ない
2001年		マンパワーがそろっていたこと	講座受講者のフォローアップ
2001年	障害者福祉サービス実務者会議の開催	・社会福祉協議会と東部地域生活支援センターで福祉事務所に提案し、福祉事務所が賛成してくれたこと ・「何か始めよう会（仮称）」で下準備を続けた	会議の案内の対象の拡大（当事者組織・ボランティアグループなど）
2002年		マンパワーがそろっていたこと	
1997年	ガイドヘルパー派遣事業の調査研究を育成会と区社協の共同事業として実施・その後、行政施策として実施・ガイドヘルパーがボランティアグループとして組織化され、NPOを取得し、支援費事業所として動き出そうとしている	区社協の全面的支援、キーパーソン存在と熟意、助成事業	事業の位置づけや意味を確認しなおす必要がある
2002年	学区社協会長と本人との話し合い 学区社協事業として位置づけ	学区社協事業としての位置づけ	
2001年	区内で活動しているサークルの把握に努め、子育て支援情報冊子としてまとめた 子育てサークル連絡会を組織連絡会としての実績をつくることで、行政のネットワーク組織に加入することを目指す	人材のひろがり	
2001年	全歴代自治会長に立ち上げについて語る ネットワーク立ち上げについての住民アンケート 立ち上げ	町内にかかわる仕組み、キーパーソンとキーパーソンを支える存在、学区社協からの認知	

NO	名称	活動内容	
09-8-(18)	サロン活動グループ	マンションの集会室での高齢者のサロン活動の実施（週1回）	マンションの大規模改修の際の、高齢者対策の必要性
09-9-(19)	学区ボランティアセンター	学区社協を基盤としたボランティア相談、ボランティアコーディネート、ボランティア活動の促進	「福祉委員」が任期後も活動に関われる仕組みとして考え出された支援組織を一般化するためのシステム
09-10-(20)	NPO法人（B）	子どもを中心とした活動（舞台鑑賞、子ども達の創造活動、子育て支援）	
02-1-(24)	区社協入浴サービス事業	地域のボランティアによる、入浴の介助と送迎の実施（入浴の難しい方にゆっくりお風呂に入っていただく事業）	老人福祉センター設立の要望の際の、地域住民のニーズ（寝たきりのお年寄りの入浴サービスを実施するための設備の設置）
02-2-(25)	子育てサークル	子育てサークル（幼稚園・保育園にあがるまでの乳幼児とその親が気軽に集まれる場所）、母親自身が運営	社協と親の声が一致した
02-3-(26)	区社協福祉送迎サービス事業	社協の車での通院等の送迎	区社協法人化の際の、体の不自由な人の移送に対する地域住民のニーズ
02-4-(27)	当事者支援グループ	高齢聴覚障害者の交流・外出事業の実施	当事者のニーズ
02-5-(28)	障害児自立援助事業	障害のある人びとの余暇をボランティアと共に支援する活動	家庭療育援助グループからの相談・要望
06-1-(29)	聴覚障害者支援ボランティアスクール	ボランティアスクールの開催（4回シリーズ）	社協と聴障協との懇談会で聴覚障害のある方の支援をしてほしいという要望があった
06-2-(30)	施設入浴サービス事業	区社協と老人デイサービスセンターとボランティアの協力による、家族介助だけでは入浴が困難な高齢者に対する施設入浴サービス事業	区社協がニーズを見込み実施
06-3-(31)	子育てサークル	①：1才から入園時までの子供のお母さん ②：0才から1歳までの子供のお母さん	お母さんからの要望。乳児保健教室に交流会を併設

時期	経過	成功要因	課題
1996年	平成8年。大規模改修委員会発足・平成12年、グループスタート。	オウム真理教の事件での住民の団結、自治会からの支援	
1996年	平成8年、4学区をモデル指定して実施・平成15年、8学区で実施		やり方がまちまちである現実に対して検証が不十分。
2000年	平成12年3月。NPO法人認証。		
1980年	市は入浴設備を設置せず住民から寄付を募り、入浴の設備を作り、民生委員を中心にボランティアで事業を行なう デイサービスセンターの入浴施設を借りて行なう 一時市社協に運営が移管されるが、区社協の法人化を受けて、再び区社協に移管	住民の支援協力	ボランティアの高齢化・担い手不足、設備・車両等の老朽化
1997年		保育経験のある母親がスタッフとして参加、拠点の確保(元小学校の一室)	スタッフの確保、ボランティアの育成
1995年		区社協事業としての支援体制、車両等の確保	ボランティアの高齢化
2001年	みみずく上京支部に生活支援事業として「じゅらくの輪」を立ち上げた		活動資金・車両・会場等の確保
1989年	1989年発足 ボランティア講座等開催 1990年週3回の活動が始まる	ボランティアの育成、拠点、活動経験	
2002年	聴覚障害者支部と区社協、区社協と3団体で月1回会議	聴覚障害者自身によるスクールへの取り組み(講演・お話・交流)	外出支援してくれるボランティアニーズ
1993年			
1998年	クラブ①発足 後輩のお母さんを助けたいと、クラブ②発足		

NO	名称	活動内容	
06-3-(32)	当事者・家族の会	月例会の実施	「機能訓練教室」修了生による活動希望
10-1-(33)	関係機関による合同ケースカンファレンスの開催	相談者のニーズの明確化。支援策については引き続き継続中	→相談者が区在住であることから福祉VC、区VC、相談者によるカンファレンスを開く
10-2-(34)	音訳グループ	週1回の音訳活動（練習会・録音）、ボランティア講座への協力	朗読ボランティア講座の受講修了生らで構成
10-3-(35)	ボランティアグループ	老人デイサービスセンターでのボランティア活動、老人福祉センターでのいきいき教室でのボランティア活動	ボランティア講座受講修了生の参加できる活動場として立ち上げた
10-4-(36)	傾聴ボランティア	ボランティア講座にて京都ALCと社協との協力	(社協からVGへ) 講座を持ちかける
10-5-(37)	朗読ボランティア講座	音訳サークル、朗読ボランティア等と社協との協力	朗読ボランティアの育成と担い手づくり
10-6-(38)	聞こえの支援ボランティア	難聴者協会・要約筆記サークル・手話学習会と社協との協力	
10-7-(39)	心の健康支援ボランティア入門講座	社協と保健所・ボランティアグループ等の協力	(社協が) 講座をもちかける
10-8-(40)	障害児のリハビリ補助	ドーマン法の補助・絵本づくり	親からの相談
08-1-(41)	区福祉送迎サービス事業	高齢・障害等によって外出が困難な区民に対する通院や社会参加支援としての、ボランティアによる送迎活動	高齢者や障害者からの相談・ニーズ
08-2-(42)	ボランティアグループ	精神障害者の作業所の昼食づくり、レクリエーション、月1回の定例会、区ボランティアグループ連絡会への参画	「心に病をもつ人が地域で安心して暮らせるようにする会」における取り組み（作業所などの開所支援、コンサート、研修会）
08-3-(43)	障害のある子どものドーマン法（リハビリ）のお手伝い	母親とボランティアによる、毎日午前と午後1回ずつのドーマン法（1回約2時間程度）の実施	母親からの相談

時期	経過	成功要因	課題
2000年1月	総会、当事者・家族の集い、各種教室、月一回の例会や勉強会、親睦交流会		
2003年	母親がいろんな機関に相談し、相談を受けた機関が合同ケースカンファレンスを提案		相談を深く掘り下げる必要 たらい回しにされて、最後に行き着くのがVCで対応に行きづまりを感じる"
1995年		講座受講修了生同士のつながり	講座を受講していないメンバーの参加
1992年		老人福祉センター、講座修了生とのつながり	ボランティアの育成、担い手不足、ボランティアの高齢化
2001年		ボランティアグループとのかわり	定期開催の検討、支所での開催、ボランティアの育成
1995年		ボランティアグループ同士のつながり	定期開催の検討、支所での開催、ボランティアの育成、内容のマンネリ化
1995年		ボランティアグループ同士のつながり	定期開催の検討、支所での開催、ボランティアの育成
1997年		ボランティアグループ同士のつながり	ボランティアの担い手不足、講座のマンネリ化
2001年		アクセス、大学の近所、親のボランティアに対する配慮	同ケースへの（違う地域）対応策の確立、ボランティアグループ・登録者の整理
1997年	運転ボランティア養成講座の実施、修了生を中心として運転ボランティアとして登録	さまざまなチャンネルによるボランティアの確保・関係機関との協力	ボランティアが利用者を待つ空き時間をどう利用するか、ボランティアが介助の部分でどこまでかかわっていったらよいか、予定外の場所を希望される場合の対応など
2002年	心の健康支援パートナー養成講座を開催 修了生がボランティアグループを結成	講座修了後のフォローアップ（3回）での今後の活動についての話し合い、社協の全面的支援	活動の拡充
2000年		広報誌などでのボランティアの募集呼びかけ、活動時間	毎日ボランティアが必要

NO	名称	活動内容	
05-1-(44)	障害児者デイ銭湯事業	障害児者の入浴介助（毎月第4土曜日）	障害児をもつ父兄からの要望、浴場組合・医師会等の協力の下に登録制ボランティアの募集
11-1-(45)	作業所連絡会	連絡会の開催、情報交換、共同事業活動	共同作業所からの、情報交換のニーズ
11-2-(46)	福祉送迎サービス	高齢あるいは心身に障害を持つ人の、車での移送、介助他必要な人の通院・会合・地域行事等への参加など生活の上で不可欠な外出・社会参加の機会を、地域の運転・介助ボランティアの協力の下で支援	在宅介護ボランティア派遣事業を通じた、病院等への移送ニーズの顕在化
03-1-(47)	デイ銭湯	入浴、送迎	高齢者や障害者のゆっくり入浴を楽しみたいという声
03-2-(48)	ドーマン法のお手伝い	ドーマン法のパターンニングのボランティア活動体制が整い、現在では、走れるようになったり会話ができるようになった	ドーマン法を利用者に教えた人が、ボランティアについては社協に相談するようアドバイスをし、家族と本人が社協に相談
03-3-(49)	ボランティアグループ	物忘れ予防教室・保健所主催の社会復帰相談指導事業への手伝い、デイサービス・共同作業所の手伝い、ドーマン法の手伝い、視覚障害者支部のお手伝い、ピーズクッションの制作	保健所主催のいきいき介護教室の修了生で発足
21-1-(50)	ボランティアグループ	近隣の4町内に居住されている方々が、自らの生活の場である地域を自らの手で守るという精神のもとに地域を見つめ直し、家族や住民相互のふれあいと信頼関係を築くことを目的として活動している（地域クリーン活動、声かけ訪問活動）	高齢者世帯と小さい子どもを持つ世帯の二極化が進み、介護と子育ての問題をかかえている地域であった。そのため、ボランティアグループが必要であると相談を受ける。

時期	経過	成功要因	課題
1999年	試用期間経過後区社協の事業として位置づけ 区社協から銭湯へ協力金、利用者からボランティアグループへ利用料金を払うことで合意	浴場組合の協力による銭湯の開放、医師会等の協力	ボランティアの確保、利用者の目的の変化（入浴→社会参加の一環）
2002年	ダイヤモンドシティの社会貢献活動の相談が区社協に入り、それを検討課題として連絡会を呼びかける	区社協が知的障害者授産施設・デイサービスセンターを運営していたこと、ネットワークの必要性、など	連絡会運営の継続、種別を超えた各作業所の課題の整理・活動展開
1998年		他区での先行事例、車両の寄贈	緊急時の対応や安全面への配慮、利用者が増えない、車椅子利用者や人工透析を必要とする人の場合における頻度の高い利用ニーズ、長時間・長距離の介助付き送迎要望の増加予想
1994年	（社協が）ボランティアグループ発足へ働きかけ 学区社協へも働きかけ、学区社協事業として確立	保険・医療・福祉の現場の専門職で構成されるボランティアグループの発足、地元の学区社協の協力、銭湯の全面的な協力、浴場組合の協力	
2001年		民生委員（週1回交替で）、母嵐ティグループバセリクラブ（月2回）が定期的に活動、区社協によるボランティアの呼びかけたい性、母親による体制の調整	ドーマン法に対する制度・施策・福祉サービスの欠如
1992年		発足当時の保健師の積極的な関与、しっかりした会員組織・新会員の積極的な受け入れ、区社協との積極的な関係、会員の活発な活動	
2003年2月頃	民生委員、町内会長等を中心にボランティアを集める	キーパーソンとなる人物の呼びかけ、社協の地域ふれあいサロンボランティア養成講座の開催、活動への呼びかけ、地域の人たちの生活に対する不安	キーパーソンとそれ以外の活動者の間での熱心さの隔たり

NO	名称	活動内容	
21-2-(51)	朗読ボランティア	小学校・児童養護施設・高齢者福祉施設等の訪問、本の読み聞かせ活動を行っている。また、視覚障害者協会に案内を送付し、「朗読コンサート」(年1回)を開催。月に1度勉強会を開催し、自己研鑽に努めている。	NKHの朗読講座を受講した人が、朗読入門講座を開きたいと言ってきた。
50-1-(52)	おしゃべりキャッチボール事業	月1回午前中、ボランティアグループに委託して開催。子育てサークルづくりや運営相談、サークルや遊びのプログラム紹介、オシャべり等を気楽に相談、遊びに来れる場の提供事業	地域のサークルが定員いっぱいでは受け入れが厳しい状況であり紹介できなかった。
50-2-(53)	バリアフリー上映会	ボランティア活動センター登録グループ(字幕付けビデオライブラリーや要約筆記サークル、リーディングボランティアなど)を中心に、「障害がある人もない人も楽しめる映画」を目指して、字幕をつけ、副音声をつけて上映会を毎年開催している。	活動センター登録グループの「団体ネットワーク部会」の交流的な目的
50-3-(54)	Hot!ふれあいサロン事業	地域での交流が減少する中、閉じこもりや孤立を防ぎ、身近な地域での仲間づくりを目的に、養護・レクリエーション等を通して地域住民の交流を図る活動(月1回以上開催)	近所の道が危険であり、手すりをつけるよう、社協から市へ働きかけてという相談
22-1-(55)	ふれあいサロン(高齢者向け)	月1回地域の自治会の一室でふれあいサロンを行っている。中心は地域の民生委員とボランティア。	同地域に住む数人の方から、別々にふれあいサロンをやりたいという話を聞いた。しかし誰もが自分を中心になってやるのはいやだということだったので、声を挙げてくださった方と友人らに集まってもらい、サロンをしたいと思っただきさっている皆さんの思いをどうすれば実現できるかを話し合う

時期	経過	成功要因	課題
2003年1月頃	最初は講師に名乗り出た人を信用していいのか迷った。講座の受講生のほとんどがボランティアを続けたいと希望	講師の能力の高さ	キーパーソンをどこまで信頼していいのか。勉強会を開催する場所の確保
2002年夏ころ	最初は社協が関与したが、途中からは参加者に任せる	偶然に同地域から同ニーズが数件あがってきて、それをうまくキャッチできたこと。参加者の中に他の子育てサークルに参加されている方がおり、運営方法などでさりげなくリードしてくださった。	普段の相談事業ではこのニーズ把握にとどまり、地域にある潜在的なニーズに至っていない。
	市民公募という形をとり、一般市民に広くこの映画上映に関わっていただくと呼びかけを行うほか、保育をつけるなど、市民のニーズに対応した形に変化してきている。	当事者からの声受け「副音声」の要望が挙がったこと、そのニーズに対しての登録グループの働きかけができたこと	フィルム代、会場美などの金銭的な負担が大きい。市民公募の集まりが悪い。団体によっては非協力的なところがあり、足並みがそろわない。当事者団体の一部からは字幕や副音声では楽しめないという意見が出てきたが、そのニーズが拾い切れていない（協議事項となっていない）
2003年10月ころ	社協が市に話したところ、他からも同様の要望が出ており、工事へ向け話が進んでいた。	地域住民が声を挙げるといいう行動をしていたこと。小グループが意見をまとめていたこと。「社協からも働きかけを」と多方面への呼びかけがされたこと。	
2003年1月	最初はすべて社協まかせて、自主性を持ってもらうよう話し合った。立ち上げ1、2回は社協が関わるが、その後独立	社協からふれあいサロン立ち上げ時への助成金を出すことにした。地域の方の思いを無駄にせず形になるよう関わっていった。自治会の理解を得られ、場所の提供をしてもらえた。	市内で移送サービスを行っているボランティアグループ・NPOが4つあるが、利用者の需要が増える割にはボランティアが少ない。またボランティアがいてもコーディネーターが出来ない等問題がある。4つの団体との交流を深め、市役所も含め今後の移送サービスの方向性を考える必要がある。

NO	名称	活動内容	
28-1-(56)	暮らしの応援ボランティア	高齢者世帯・福祉世帯を対象に、草刈り・庭木の剪定・手すりの取り付けなど、暮らしに根ざした活動を展開	独居や高齢者が多い地域で高齢になり草刈りが出来なくなったなどの相談から
28-2-(57)	デイサービス介助ボランティア	町内のデイサービスセンターでの活動	もとは別のサークル会員であった女性メンバーがそこでの活動は男性に適した活動で物足りなさを感じ、自分たちにも出来る活動がしたいとの相談から
46-1-(58)	丹後6町音訳・朗読ボランティア交流会	丹後6町の音訳・朗読ボランティアグループで交流会を1度行なった	音訳ボランティア「ラビット」より、「丹後6町では同様の活動している音訳・朗読ボランティアグループがいくつかあると聞くが、他町ではどのような活動をしているのか知りたい、また、合併後活動はどうなるのだろうか」という相談があった。

時期	経過	成功要因	課題
1995年	日曜大工などの得意な住民が集まり活動を始める。施設での活動や料理教室など地域福祉に根ざした多岐にわたる活動を展開するが、ニーズの幅が広く会の規定を作り、高齢・障害者等の福祉世帯に限定し活動、現在に至る	活動趣旨に賛同し意欲のある住民の参加。キーパーソンが存在。会報の発行。社協の協力（ニーズの発掘～ヘルパーなどから、定例会の開催～VC・ヘルパー同席）	活動者の高齢化、シルバー人材センターの設立に伴う活動の減少。介護保険による活動の減少。それに伴う活動意欲の低下も見受けられる。
1997年	車イスの講習や身体介助の方法の実習をうけデイサービスセンターでの介助ボランティアをはじめ	活動趣旨に賛同し意欲のある住民の参加。キーパーソン存在。利用者とのふれあい。社協の協力（3ヶ月毎の定例会、介護方法の勉強会の開催）	活動の高齢化。若年層の参加がない。
2003年6月	丹後6町社協合併協議会のボランティア担当社会の中で話し合い、他町でも同様の動きがあることから、お互いの活動を知り、今後広域での活動を展開していくきっかけとなることを目的に、丹後6町社協共催事業として交流会を実施した	丹後6町社協合併協議会の中で、ボランティア担当会が位置づけられており、ニーズから事業に発展していける話し合いの基盤があったこと。他町のグループから同様の相談が出ていて、タイムリーであったこと。	経費は共同募金から支払いをしたが、年度当初の計画にはなかった事業であるため、共同募金担当者の理解が得られず困った。今回は「顔合わせ」的な意味合いでの交流会であったが、今後につなげていくために次に展開を模索中。